

# 「金網」に囲まれた島・ 沖縄の「音」

呉屋 淳子 民博 機関研究員

## 「金網」の向こう側

アメリカ兵は身分証明書（通称「アイディパス」）無しで沖縄に入ることができる。それとは逆に沖縄に住む人びとは、アイディパスなしで「金網」の向こう側（米国）には行けない。しかし、例外として、運良くアメリカ兵にエスコートしてもらえする場合もある。

「金網」のなかの世界は、本国のアメリカと同じだという。そのため、エスコートされた人は「金網」の向こう側と行き来することで、自分を特別な存在と思いついてしまう。アメリカに行った気分になつてしまうのだろうか。いずれにせよ、そんな「国境」が島には存在している。

## 生活に染みこむ騒音

アメリカ空軍の最大の戦闘機部隊基地である嘉手納基地周辺は、もつとも騒音が酷い地域である。ここでは、昼夜を問わない訓練が繰り返しておこなわれるため、軍用機の「音」は常に沖縄の人びとの生活のなかに入り込んでいる。

残念ながら、こうした基地から吐き出される「音」は、沖縄の人びとの体のなかにも侵入している。基地近隣の



民家の上空を悠々と飛ぶオスプレイ

学校に通う子どもたちは、難聴の疑いがある。たとえば、休み時間のお喋りの声が異常に大きくなつてしまい、話している本人でさえもそのことにほとんど気づいていない。また、ある学校では軍用機の低周波の影響を受け、体調不良で休職・休学を余儀なくされた教員や生徒もいる。このような状況にもかかわらず二〇一二年には、戦

闘機、輸送専用の軍用機に加え、あらたにオスプレイが追加配備された。「金網」の外にいる人びとにとって、あらたな「音」の到来にはなすすべはない。

## 奏でられる音

そんな島でなぜ人びとは暮らせるのだろうか。沖縄の人びとは、喜びにつけ悲しみにつけ、詩を詠み、そして歌を歌ってきた。それは「金網」に囲まれる以前から続いている。こうした沖縄の人びとによって奏でられる「音」は、島が「金網」に囲まれても、沖縄の人びとの心の支えとなってきた。だから、人びとは島を離れないのである。

軍用機から吐き出される「音」に負けない、力強さをもつた沖縄の「音」が、今もどこかで生み出されている。